

清水 滝

&lt;今回&gt;265回目 2019年9月9日(月)16時~18時 601号室

読書は10冊目「失われた九州王朝」再読 p83 郊迎の地

&lt;前回&gt;264回目(19-8-26) 出席者 11名

資料(19-07-26-1)前回のまとめ(清水)

- 2)阿倍仲麻呂の従者(清水)
- 3)国立歴史民俗博物館展示替え(榛葉)
- 4)方位の考古学(肥沼)

A 報告 高山氏が健康を回復されて5か月ぶりに出席された。咳がひどくなって肺炎を併発して重症化して入院されたが、回復直後又ひどい咳込みから腰椎の骨にわずかな欠けの故障が出てひどい痛みになった。義父母の1周忌も重なり多少無理したため回復が遅れたという。加齢と共に、適度な運動も必要である。

B 資料 -2)、阿倍仲麻呂の従者の羽栗吉麻呂と息子翼(つばさ)、翔(かける)のことが類聚国史、仏道部還俗僧の項に出ているのが出典である。翼は遣唐使になり、天寿を全うした。翔は一足早く遣唐使になり、在唐していた藤原清河のところに寄った後は行方不明になっている(数奇な運命)。および杉本直次郎博士の博士論文から勝鬘経にも「此是大委国上宮王私集非海彼本」と法華経義疎で古田先生が家永三郎氏と「法隆寺論争」で指摘した同じ文言が見つかったと報告した。

-3)国立歴史民俗博物館の常設展示が久しぶりに模様替えとなる。こんど八王子セミナーに開講講師として招かれる藤尾慎一郎氏の炭素14年代決定法の進展定着によるものである。

-4)肥沼氏の方位の考古学のその後の進展が報告された。これまでの福島の泉官衙遺跡の六世代の遺蹟柱穴の変遷に、三重県の斎宮の東偏の発見など、この時期に磁石が西偏している中で東偏の建物が作られている理由を中国南朝の都城跡の東偏の模倣に求めている論がはっきりしだした。地方の国分寺や官衙あとの方位の研究の進展に期待している。聖武天皇の国分寺の詔は7重の塔を作れという意味であるという。

懇親会8名 津多屋14958円(1800・6+2000・2+1500) -658円

C 読書 p80「伊都国」の意味するもの

- 1)三國志の外国現地音表記は純粋な表音主義ではない。①に表音②に表意、この2つの結合である。卑弥呼の卑も邪馬壹国の邪も遠方より朝貢してきた神秘の女王国に対するよりふさわしい文字の用法である。(基本的には文化的に劣った国や地域に対する用法ではないか)
- 2)伊都国の「都」はト音として用いられている。、魏晋の首都の近くの地名「伊闕」を4例示した。闕は天子の居城を示す言葉で洛陽の中心にあった。
- 3)伊邇(これちかし)「注水経」は「水経注」の誤り。中国大陸の川の様子を書いたものにつけた注釈書の意味。
- 4)伊都は女王の都のこれ(伊)近くという意味を持った地名として陳寿が文字を決めた。都はト音であり、ヤマトを表すときは都の文字をつかうだろうから女王国にはヤマトという現地音はない。

次回日程 19-9-9-27(金) 15時から18時 602会議室

-10-7(月) 16時から18時 601会議室

-10月25(金) 15時から18時 601会議室

-11-11(月)16時から18時 601会議室